

芭蕉布

徳川家康へのご進物品

毛利家伝来の新出史料によると、1610年、徳川家康が琉球王・尚寧と対面したときの進物品の覚書に、

- 一 五十端 はせを布（芭蕉布）
- 一 五ツ 食籠
- 一 四十人前 おしき（折敷）
- 一 三ツ 酒壺
- 一 壺ツ けんひや（硯屏）

と記されている。天下の公方様に差しあげた芭蕉布が、どのような布であったのか、無地か色物か、編柄か平織か……。今となっては想像するしかないのだが、極上の薄物であったことは確かだといつてよい。

沖縄は染織文化の豊かな地域で、その代表的な伝統工芸品として芭蕉布があげられる。芭蕉布は糸芭蕉の皮の繊維でつくられた糸を織った布である。かつては沖縄のどの家庭にも糸芭蕉の畑と機があり、家族の織った芭蕉布は夏の着物としてかかせないものだった。有名な芭蕉布としては首里・読谷・今帰仁産のものがあったが、現在では大宜味村喜如嘉のみとなっている。

糸芭蕉は2～3年たつと刈り取りしやすい高さで芯止めされ、葉打ちを何回もしてから、秋～冬に刈り取られる（芋倒し）。反物を1反織るには、糸芭蕉が約200本必要で、反物に仕上がるまでに20あまりの工程があり半年以上の時間がかかる。

芭蕉布の生成の地に、天然染料を使った藍と茶の伝統色で模様を入れる。原木の表皮から中心に向かって、4種類の原皮に分けられ（右上写真は左端〈表皮に近い〉～右端〈中心〉）、用途は、外側から座布団カバー等、帯地用、反物用、染色用となっている。

芭蕉布のおもな製造工程

現在、喜如嘉でつくられている芭蕉布は、大正年間に地機が高機に移行したことを除けば、その工程は産業革命以前と何ら変わることなく受けつがれており、モーターのついた機械・工具は一切使用され

喜如嘉芭蕉布事業協同組合理事長 平良美恵子

ていない。撚り掛けも糸車を用い、精練も木灰使用というふうには化学的なものは全く使わないでいる。工程を簡単に紹介すると、「芋はぎ」糸芭蕉の畑は栽培されたもので、野生のものはロープにはなっても布としては硬くて使えない。刈り取った原木の皮をはぎ、畑で皮を4種類に選別し、束ねておく。



「芋炊き・芋引き」木灰汁を沸騰させ束ねた原皮を入れて煮てやわらかくする。この加減は大変難しく、ベテランでも失敗することがある。その後水洗いし、



竹ばさみでしごいて不純物を取り除く。

「チング巻き」芋引きして乾いた繊維は、色や硬さによって選別し、まり型に巻いておく。

「芋績み」繊維を裂いて糸をつくる。糸は機結びで、根と先を順番につないでいく。一番骨がおれる仕事で、熟



練者でないと均一な糸を績む（つなぐ）ことはできない。約22,000回つないで1反分の材料ができるといわれている。

「撚り掛け」毛羽立ちを防ぎ、糸を丈夫にするため糸に撚りを掛ける。湿り気を与えながら、糸車でひねりを加え経管に巻き取る。



「緋結び」染める前の作業で、緋模様をつくるために、染めない部分に芭蕉原皮の裏皮を巻き、その上をビニール紐で巻く。

「染め」天然染料を使い、何十回と染めることで茶色や藍色が染まる。

「織り」糸は水に浸して軽く絞ってから織る。弾力性のない糸なので、緋合わせが難しく、綿や絹のような複雑な緋柄は不向きである。



「反物の洗濯」織りあがった布は、木灰で炊き、その後ユナジ液（米酢）に浸してもみ洗いし、手で長さや幅出しをする。



芭蕉布は最初から最後まで喜如嘉でつくられ、外注する部分はない。どこをとっても沖縄100%の布である。**時代の波に乗れなかった布**

琉球王国時代には、芭蕉当職という役職があり、畑の管理まで厳しくなされていたようで、1712年発行の寺島良安編「和漢三才図会」の中には、葛（葛でつくる布。静岡県掛川が有名）と並んで芭蕉布の記載がある。しかし、明治に入り近代化の波が押し寄せてくると、人々の暮らしも変化し、しだいに糸を績む人も少なくなり、芭蕉布は衰微していく。昭和初期には、芭蕉布づくりが奨励されたが、安く手に入る紡績糸に太刀打ちできず、戦後は衣生活の西洋化もあり、着物として呉服の道を歩む芭蕉布は守り育てる布になってしまった。

世界にほこる布、芭蕉布の未来

大宜味村喜如嘉は約350人の小さな集落で、布づくりにたずさわっている人は約70名。いかにしてこの布を次世代に受けついでいくのか、大変難しいところにきている。肥料入れや草取り等農業の部分が多く、鎌一つ持ったことのない若い世代にとって、小刃を研ぐことは大事件なのだ。蜂に刺されて病院に走ったり、蛇が畑にいて大騒ぎしたりと、織ること以外の苦勞が多々ある。

地球温暖化もあり、糸の品質も悪くなっているようで、大正・昭和に比べ平成では製造効率が悪くなっていることは確かである。しかし、独特の麻のようなしゃり感、軽くて涼しい布が世間の注目を浴びていることも事実で、この布の魅力にとりつかれ、この仕事に生きがいを感じる一握りの人たちがいて芭蕉布は守られている。常に糸芭蕉をアピールし、糸績み技術等をいろんなところで見せる等、沖縄の芭蕉布の存在をこれからも伝えていきたいと願っている。



芭蕉布の着物

うすはぎ



緋糸の組み合わせ